



シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンス：相互理解促進モデル

著者	浜名 恵美
発行年	2010
その他のタイトル	Intercultural Performance of Shakespeare ' s Plays: A Model for Promoting Mutual Understanding
URL	http://hdl.handle.net/2241/107777

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520193

研究課題名（和文）シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンス：相互理解促進モデル

研究課題名（英文） Intercultural Performance of Shakespeare's Plays: A Model for Promoting Mutual Understanding

研究代表者

浜名 恵美（HAMANA EMI）

筑波大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：20149355

研究成果の概要（和文）：異文化主義(interculturalism)および異文化パフォーマンスに関する問題点を重点的に検討し、異文化パフォーマンスの実地調査、国内外の関連学会への参加と研究者との意見交換、インターネットを含めた情報収集、映像資料分析、文献調査、国内外で発表された論文および口頭発表をとおして、相互理解促進に資する上演のヒントを見出すと同時に、今後のシェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスのあり方に有意義な提言を行なうことができた。

研究成果の概要（英文）： While examining selected intercultural performances of Shakespeare's plays in Japan and abroad, I actively took part in international Shakespeare conferences and explored the intercultural performances of Shakespeare's plays that would contribute to promoting intercultural understanding. I was able to find suitable performances and make effective suggestions for the intercultural performance of Shakespeare's plays.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
平成 19 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
平成 20 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 21 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：シェイクスピア、異文化パフォーマンス、異文化コミュニケーション、相互理解

1. 研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）（平成 16 年度—18 年度）「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」の発展を目指して始まった。

（1）国内・国外の研究動向及び位置づけ

日本シェイクスピア協会会長・楠明子氏が平成 18 年 8 月に連合王国で開催された第 32 回 International Shakespeare Conference に関して、「恐らく協会史上初めてと思われ

るが、現代におけるシェイクスピア劇の上演を媒介とした異文化コミュニケーションの問題を扱うセミナーが設けられた」と報告しているように、(*Shakespeare News*, September 2006, Vol. 46, No. 1, p. 2)に、私が平成 15 年度に科学研究「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」(平成 16-18 年度)を申請した年からの数年間で大きな変化が観察された。平成 18 年 7 月開催の第 8 回 World Shakespeare Congress(5 年毎に開催、2006 年開催地はオーストラリア)の多数のセミナーや研究発表でも“intercultural”という用語が何度も言及されていた。

さらに、平成 18 年 10 月開催の第 45 回日本シェイクスピア学会で私がコーディネーターを務めたセミナー「シェイクスピアと異文化プロダクション」(使用言語: 英語)には多数の参加者を得られただけでなく、シンガポール国立大学助教授で異文化演劇の研究者である Li Lan Yong 博士が海外から参加を申し込まれたし、日本シェイクスピア学会がゲスト・スピーカーとして招聘したイギリスのシェイクスピア研究所所長 Kate McLuskie 博士も当該分野に深い関心を示され、国内・国外ともにシェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスの研究を推進する機が熟したと言えた。

(2) 着想にいたった経緯(従来の研究成果をふまえ)

シェイクスピア研究者の中に異文化コミュニケーションへの関心の高まりが見られるようになったとはいえ、まだ決して十分なものではない。また、異文化パフォーマンスに関心を示しても、現時点では、相互理解促進に関しては無関心か懐疑的姿勢を示す傾向がある。多くのシェイクスピア研究者はシェイクスピアの作品をローカルにどう上演するかに注目している。しかし、本研究では、どれほど困難でも、世界の人々の共生のためには、相互理解促進が最重要だと考えるので、これをモデルとして探究することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は平成 16-18 年度の科学研究「シェイクスピア演劇における異文化コンフリクト理解のための分析モデル構築」を発展させたものである。平成 16-18 年度は異文化コンフリクトを重点的に追究したが、本研究では異文化コンフリクトを乗り越える「異文化理解」に重点を置く。

本研究では、演劇・パフォーマンス理論と異文化コミュニケーション理論を接合する。多くの演劇研究者の関心は、目標の文化(target culture)に自文化を伝え理解しら

もうことに集中し、異文化コミュニケーションでは最重要概念である相互理解に関する認識は十分ではない。したがって、世界各地で最も多様な方法で異文化パフォーマンスが行われているシェイクスピア演劇を対象として、異なる文化間の相互理解の促進という観点から上演を分析し、この観点からひとつのモデルを提示することを目指した。

研究期間内の具体的目的

[平成 19 年度] 異文化主義(interculturalism)及び異文化パフォーマンスに関する定義論争が続いている。1 年目は、まず、この問題を重点的に整理・再検討し、文献調査により国内・国外の上演を参考としながら、相互理解を重視した異文化パフォーマンスの特色、可能性、潜在的限界などを分析する。次に、シンガポール及び連合王国に出張し、シェイクスピア演劇の最新の異文化パフォーマンスを実地調査し、最新の動向の一端を分析し、相互理解に資するシェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスのモデルを模索する。1 年目の成果を英語論文の形で発表する。

[平成20年度] 2年目は、国際シェイクスピア学会で研究発表を行い成果を問うとともに、海外研究者との関係を強化する。特にヨーロッパ及びアジアの研究者とのネットワークを維持発展させる。こうした知的・人間的関係を基盤として、世界の上演に関する多数の貴重な情報を入手して、本研究を補強・充実させる。さらに、相互理解促進に資するシェイクスピア演劇と異文化パフォーマンスの理論的・実践的検討を推進する。

[平成21年度] 3年目は、引き続き国際シェイクスピア学会で研究発表を行い成果を問うとともに、特にヨーロッパ及びアジアの研究者とのネットワークを維持発展させる。3 年間の総括を行い、相互理解促進に資する上演のヒントを見出すと同時に、今後のシェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスのあり方に有意義な提言を行なう。

3. 研究の方法

主要な方法は、国内外のシェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスの実地調査、国内外の関連学会への参加と研究者との意見交換、インターネットを含めた情報収集、映像資料分析、文献調査である。

4. 研究成果

(1) 平成 19 年度の研究成果
世界各地のシェイクスピア演劇の上演を相互理解促進に資する異文化パフォーマンスの

視点から重点的に分析し、相互理解促進モデルを探究するために、以下の研究活動および情報公開活動を行った。

- ①シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスの理論モデルを構築するために有効な参考事例として、文献研究および観劇（実際の観劇または視聴覚資料）により、現代日本およびアジアにおける異文化パフォーマンスまたは異文化コラボレーションに関して調査・考察し、2つの論文を発表した。
- ②平成19年8月12日－29日、連合王国出張。エディンバラ国際芸術祭およびフリンジ、ロンドンのロイヤル・ナショナル・シアターおよびグロブ・シアターでシェイクスピアの異文化パフォーマンスを調査し、その成果を英文の報告として発表した。また文献収集を行った。
- ③平成19年11月22日－27日、シンガポール出張。エスプラネイド・シアターで上演されたタミル系シンガポール人の劇団によるシェイクスピア作品の上演等を調査し、その成果の一端を海外新潮として発表した。また文献収集を行った。
- ④ホームページを開設し、平成19－21年度科学研究費補助金交付研究に関して、研究課題、学術的意義、当該研究の学術的背景・特色・独創的な点および予想される結果と意義、平成19年度の研究活動等を写真も入れて公開した。（平成19年度は主に日本語版。）
なお、平成20年3月16－21日開催のオックスフォード円卓会議（テーマ：Women in the Modern World: The Struggle for Equality）に招待されたので、3月19日に口頭発表を行った。シェイクスピアの異文化パフォーマンスに直接の関係はないとはいえ、世界各地でジェンダーを代表とする異文化相互理解がますます必要とされることを再認識する良い機会となった。

（2）平成20年度の研究成果

世界各地のシェイクスピア演劇の上演を相互理解促進に資する異文化パフォーマンスの視点から重点的に分析し、相互理解促進モデルを探究するために、以下の研究活動および情報公開活動を行った。

- ①シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスのモデルを構築するために有効な参考事例として、文献研究および観劇（実際の観劇または視聴覚資料）により、現代日本、ヨーロッパ、アジアにおける異文化パフォーマンスまたは異文化コラボレーションに関して調査・考察し、以下のように、2本の論文を発表し、2本の口頭発表を行った。
- ②平成20年7月8日－16日、ハンガリー共和国出張。ジュラ城劇場第4回シェイクスピア祭を実地調査しその成果を英語の論文と日本語の海外新潮として発表した。
- ③平成20年9月9日－13日、中華人民共和国出張。連合王国ノッティンガム大学寧波キャンパスで開催された国際シェイクスピア会議に招待され、本研究に関連する口頭発表を行った。
- ④平成20年9月23日－28日、台湾出張。国立台湾大学で開催された国際シェイクスピア会議に招待され、円卓会議で本研究に関連する口頭発表を行った。

- ⑤ホームページに英語版も開設し、平成19－21年度科学研究費補助金交付研究に関して研究課題、学術的意義、当該研究の学術的背景・特色・独創的な点および予想される結果と意義、平成20年度の研究活動等を写真も入れて公開した。

- ⑥平成21年3月26日－31日、連合王国研修。ロンドンで異文化パフォーマンスの実地調査を行った。

（3）平成21年度の研究成果

世界各地のシェイクスピア演劇の上演を相互理解促進に資する異文化パフォーマンスの視点から重点的に分析し、相互理解促進モデルを探究するために、以下の研究活動および情報公開活動を行った。

- ①シェイクスピア演劇の異文化パフォーマンスの理論モデルを構築するために有効な参考事例として、文献研究および観劇（実際の観劇または視聴覚資料）により、現代日本、ヨーロッパ、アジアにおける異文化パフォーマンスまたは異文化コラボレーションに関して調査・考察し、以下のように、上演研究と国際学会で2本の口頭発表を行った。
- ②平成21年8月15日－23日、富山県利賀芸術公園出張。利賀国際演劇祭において本研究に関連する国内外の上演研究を行った。
- ③平成21年9月10日－15日、連合王国出張。ロンドン大学キングズ・カレッジで開催されたイギリス・シェイクスピア学会（BSA 2009 Conference）に参加し、本研究に関連する口頭発表を行った。
- ④平成21年11月25日－28日、台湾出張。国立台湾大学で開催された第4回シェイクスピア・フォーラムに参加し、本研究に関連する口頭発表を行った。発表内容は、プロシーディングズに掲載された。
- ⑤日本語と英語のホームページを維持し、平成19－21年度科学研究費補助金交付研究に関して、研究課題、学術的意義、当該研究の学術的背景・特色・独創的な点および予想される結果と意義、平成21年度の研究活動等を写真も入れて公開した。

（4）3年間の成果の総括

本研究の主要な成果としては、以下の三点を挙げることができる。

- ①英語論文3本、日本語論文3本、英語口頭研究発表5本、日本語図書1本。
- ②海外出張（連合王国4回、シンガポール1回、中華人民共和国1回、台湾2回、ハンガリー1回）、国内出張（静岡県、大阪府、富山県、新潟県）による実地調査。
（注）自費等による出張を含む。
- ③英語と日本語によるホームページの開設・維持

①から③によって、国内外のシェイクスピアの異文化パフォーマンス研究の基盤を構築することができた。しかし、特に商業劇場のシェイクスピア上演で異文化の相互理解

を目指すことは容易ではなく、それより「文化的差異を味あう」という形式での相互理解を目指す方が現実的であるという認識を深めたので、今後は、この視点から研究課題を発展させる必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① Emi Hamana, “*Othello* in Japanese Dream Noh Style with Elements of Korean Shamanism: The World is a Festival,” The Fourth Conference of the NTU Shakespeare Form “Shakespeare in Culture,” Novembver 26-28, 2009, Conference Proceedings, 査読有、2009年、121-133頁。
- ② 浜名恵美「海外新潮 ジュラ城砦劇場第4回シェイクスピア祭(ハンガリー共和国)——りゅーとぴあ能舞台シェイクピア『冬物語』公演——」, *Shakespeare News*, Vol.48, No.3, pp.12-15, 査読有、2009年
- ③ Emi Hamana, “Intercultural Performance of Shakespeare’s Plays: An Exploration of Intercultural Understanding by Focusing on *The Winter’s Tale* by Ryutopia Noh Theatre,”『文藝言語研究 文藝篇』第55巻、1—17頁、査読有、2009年
- ④ 浜名恵美「海外新潮 *Thondan*: シンガポール・文語タミル語翻訳・翻案『タイトル・アンドロニカス』」, *Shakespeare News*, Vol.47, No.3, pp.37-40, 査読有、2008年
- ⑤ Emi Hamana, “A Report on the Performances of Shakespeare’s Plays at the 2007 Edinburgh International Festival Fringe,”『外国語教育論集』第30巻、171-181頁、査読有、2008年
- ⑥ 浜名恵美「異文化演劇コラボレーションの成果と課題—アジア四カ国共同制作作品『モバイル』に焦点を合わせて—」,『文藝言語研究 文藝篇』第53巻、11-26頁、査読無、2008年

〔学会発表〕(計5件)

- ① Emi Hanana, “*Othello* in Japanese Dream Noh Style with Elements of Korean Shamanism: The World is a Festival,” The Fourth Conference of the NTU Shakespeare Forum “Shakespeare in Culture,” 2009年11月27日、国立台湾大学(台湾)

- ② Emi Hamana, Seminar: Asian Shakespeare in Europe (leader: Alex Huang), “Japanese Noh Shakespeare Goes to Europe: *The Winter’s Tale* by Ryutopia Noh Theatre Shakespeare (RNS) in Central and Eastern European Tours in 2006 and 2008,” 4th British Shakespeare Association Conference, 2009年9月11日, King’s College、ロンドン大学(イギリス)
- ③ Emi Hamana, Roundtable Discussion: Shakespeare in Asia, The Taiwan National University Shakespeare Forum 2008年9月25日、国立台湾大学(台湾)
- ④ Emi Hamana, “Intercultural Performances of Shakespeare’s Plays: A Model for Promoting Intercultural Understanding,” International Shakespeare Conference at University of Nottingham Ningbo, China, Renderings: Shakespeare Across Continents, 2008年9月11日、ノッティンガム大学寧波(中国)キャンパス
- ⑤ Emi Hamana, “The Struggle for Equality in Japan: An Analysis of the 2007 External Report of Gender Policies Proposed by the Science Council of Japan,” The Oxford Round Table, 2008年3月19日、オックスフォード大学(イギリス)

〔図書〕(計1件)

- ① 浜名恵美「現代(日本)演劇における移動と変容—平田オリザ作『ソウル市民三部作』、野田秀樹作『The Bee』、三谷幸喜作『笑の大学』に関する考察」, 筑波大学文学批評研究会編『テキストたちの旅程—移動と変容の中の文学』、花書院、314—327頁、分担著、2008年

〔その他〕

ホームページ

<http://www.emihamana.com>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜名 恵美 (HAMANA EMI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：20149355